

アクティブ・ラーニングと高大連携を生かした国語表現の実践

—地域連携授業の展望と課題—

富樫千紘

● 要約

本稿は、2016年度の私立稚内大谷高校における「国語表現」で取り組んだ、「私達の高校のいいところ報告会」という単元について紹介するものである。この単元では、アクティブ・ラーニングの手法に加え、高大連携型授業として、大学で発表を行うという取り組みを行った。

以上の取り組みの概要を整理し、生徒の意見等をもとに、近年課題となっているアクティブ・ラーニング及び高大連携を活かした「国語表現」の実践の課題と展望を抽出する。

● キーワード

アクティブ・ラーニング

高大連携

つたえあう力

国語表現

地域連携授業

はじめに

高校における選択科目「国語表現」の学習目標は、生徒の「伝え合う力」の形成にある。そのため、近年課題とされているアクティブ・ラーニングの手法を取り入れ、生徒自らが、「自分の伝えたいこと（自己理解）を他者に伝える（他者理解）」という営みに取り組むことは、極めて重要である。また、その際、学内での「伝え合う」（発表・討論等）活動のみならず、学外でもそうした機会を持つことは、学習効果として有効なのではないかと考えられる。

著者は2016年度、私立稚内大谷高校（以下、稚内大谷高校）において、高校三年生を対象とする「国語表現」を担当した。この科目において、アクティブ・ラーニングの手法に加え、稚内大谷高校と稚内北星学園大学の高大連携を通じて、同大学にてプレゼン・発表活動を行うという取り組みとして、「私達の高校のいいところ報告会」（以下、報告会）を行った。

本稿では、この報告会について、単元全体の概要を整理し、生徒の意見・感想や、報告会参加者の意見・感想等をもとに、アクティブ・ラーニング及び高大連携を活かした国語表現の実践の展望と課題を抽出する。

1. アクティブ・ラーニングの教育政策的展開

（1）教育政策におけるアクティブ・ラーニングの導入

教育政策において、アクティブ・ラーニングが唱えられるようになったのは、中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(2012年8月28日)からであった。このように、アクティブ・ラーニングは当初は高等教育において語られていたのだが、2014年11月20日付の文部科学大臣諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」にて、アクティブ・ラーニングの充実が勧告されたことにより、初等中等教育においても注目されるようになった¹。そして、次期学習指導要領においても、「『アクティブ・ラーニング』の視点からの授業改善」が、改善のポイントとして示されている（中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(2016年12月21日)²）。

（2）アクティブ・ラーニングの意味内容と課題

では、アクティブ・ラーニングとは何か。前述の答申によれば、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善とは、「主体的・対話的で深い学び」の実現にある。「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点を通じて、「学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること」が目指されている。

他方、アクティブ・ラーニングに関する理論・実践研究においては、既に多数の課題が提示されている。本稿の実践とも関わる指摘としては、以下の二点が挙げられる。第一に、「アクティブ・ラーニングによる能力の形成と、体系的な知識の習得のバランスが取りにくい」という点、第二に、「アクティブ・ラーニングでどのような力（教科内容）が身につくのが具体的に論じられないまま、方法の検討に終始するのでは、活動主義を招く」という点である³。

以上を踏まえつつ、単元「私達の高校のいいところ報告会」を見ていくこととする。

2. 稚内大谷高校「国語表現」の授業—「私達の高校のいいところ報告会」の概要

(1) 選択科目「国語表現」の目標—伝え合う力の育成

「国語表現」の目標は、以下の通りである。

国語で適切かつ効果的に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、言語感覚を磨き、進んで表現することによって、国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。(文部科学省「高等学校学習指導要領解説 国語編」平成22年6月)

国語表現は、「伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育成すること」をねらいとした選択科目である。

学習指導要領解説においては、「話すこと・聞くこと及び書くことを中心として内容を構成し、情報を基に自分の考えをまとめること、相手の立場や異なる考えを尊重して話し合うこと、論理の構成や描写の仕方を工夫すること、表現の効果を吟味したり文章を読み合って批評したりすることなどを重視している」こと、「目的や場に応じて言葉遣いや文体を工夫すること、国語における言葉の成り立ち、表現の特色や言語の役割の理解を深めることなどを取り上げている」ことが述べられており、具体的には、「討論する、解説や論文をまとめる、小説や実用的な文章を書くなどの言語活動」が例示されている。

さて、「伝え合う力」を高めるためには、実際に様々な方法で表現をすることが重要であり、学習指導要領解説においても様々な言語活動の例が提示されているが、とりわけ、「発表や討論をする言語活動」については、以下のような記述がみられる。

「発表」や「討論」をする際には、必ず具体的な相手が存在し、その相手に向かって言語活動を行う。そこで、相手の立場や状況などを把握して、自分の考えを分かりやすく伝えることができるよう工夫する必要がある。同時に、聞き手も、論点の明確さ、主張や論拠の妥当性、例示の適切さなどに注意しながら、相手の話を聞くことが大切である。話し手と聞き手が対等に意見を交換し合う討論だけでなく、発表の場合でも、話し手に対して、聞き手が聞き返したり尋ねたりする学習を適宜組み込む必要がある。相手意識を明確にし、話し手と聞き手双方の交流の中で学習が効果的に進むよう配慮することが大切である。

(傍線は引用者)

こうした「相手意識」について、本授業内では「他者理解」と表現して生徒の授業を行ってきた。また、「自分の考え」をまとめることについては「自己理解」、そして「言語感覚を磨く」点については「様々な表現方法の獲得」として位置づけてきた。本稿で記述する「私達の高校のいいところ報告会」の実践は、特に「他者理解」に焦点を当てた内容であり、直接的には「発表や討論をする言語活動」に該当する。

(2) 「私達の高校のいいところ報告会」の目標と内容

「報告会」の学習目標・内容・計画は以下の通りである。

A. 実施クラス

- ・ 稚内大谷高校 3 年生 B、C クラス (計 58 名)
- ・ 各クラス 6 班 (1 班あたり 4～5 名)

B. 学習目標

- a. 伝えたいことを整理できるようになること (自分の考えをまとめる)
- b. 自分と異なる他者の考えを尊重して話し合えるようになること (グループワーク)
- c. 学校外での発表を通じて、表現する力を育てること (学外での発表)

C. 学習内容

- a. プレゼンテーションを作成し、発表する
 - ・ 伝えたいことを明確にし、グループ内で深める
 - ・ プレゼンテーションの作り方・発表方法の学習
- b. 学外者に伝わりやすい発表をする
 - ・ 自分達の知らない他者に対して、わかりやすい発表をつくり、実践する
- c. 報告会の案内の作成
 - ・ 手紙・メール・チラシづくりのマナーや手法の学習

D. 学習計画

①オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none">・ グループ分け・ 学習目標・内容の趣旨説明
②グループワーク (1) ブレインストーミング	<ul style="list-style-type: none">・ 稚内大谷高校のいいところについて、5 分間で 5 つ考え、考えたものを付箋に書いていく・ 模造紙に貼り、班員の意見をグルーピングする・ 模造紙をもとに、自分達が報告したい「いいところ」を絞る
③グループワーク (2) プレゼンテーション作成	<ul style="list-style-type: none">・ プレゼンテーション下書きシートの作成・ プレゼンテーションの作成・ 発表練習
④クラス内発表・相互評価	<ul style="list-style-type: none">・ クラス内発表・ 相互評価シートで他班の発表を評価する・ 自分達の発表も振り返る
⑤グループワーク (3) プレゼンテーション完成	<ul style="list-style-type: none">・ 自己評価・相互評価をもとに、プレゼンテーシ

	ョンを完成させる
⑥報告会案内物作成	・手紙、メール、案内文、広報チラシの作成 (各グループに1つずつ作業を割り当て)
⑦いいところ報告会当日	・会場：稚内北星学園大学 ・対象：同大学学生・教職員 ・発表の方法：紙芝居形式 ・発表の形式：ブース形式 ▼ 2クラス全12班分のブースを設け、参加者がブースを回って発表を聞く形式をとる。 ▼各班を前半発表者・後半発表者の2組に分け、発表をしない時間、生徒は他クラスの発表を聞く。
⑧報告会反省会・振り返り	・会全体の反省 ・お礼状の作成

以上のように、「報告会」は、稚内北星学園大学を会場として、同大の学生・教職員を聴衆として実施することとした。それまでの授業ではクラス内の発表に取り組んだが、本単元では「内輪受けからの脱出」として、自分達の知らない場所・知らない他者に対して発表をする機会とした。それゆえ、学習目標のb・cに特に重点を置いている。

自分達が通って三年目になる「高校」の「いいところ」を考えること、一番伝えたい「いいところ」は何か、それを伝えるためにはどのような方法（スライド・説明の方法・話し方等）を取るといいのか等、班のメンバーで検討を行った。自分の伝えたいことと他のメンバーの考えをすり合わせ、発表内容を決めていく過程それ自体も、「伝え合う力」を形成する上での重要な機会であった。

また、報告会実施に関する案内物（手紙・メール等）の作成に取り組むことを通して、それらの案内物作成の方法についての学習を行った。

3. 「私達の高校のいいところ報告会」の学習効果

（1）本単元の間接評価：クラス内発表における生徒の振り返りから

本単元の間接評価として、学習計画①～④がおわった段階で生徒に振り返りシートを記入させた。その感想の概要を以下に述べる。

1) 各班の発表について

まず、各班が考えた「いいところ」について、「大谷の良いところは、他の班と視点が似ていたため、視点を考えるのは難しいと思ったし、人の気をひくようなことを伝えていくにはどうしたら良いのかが難しかった」という記述が複数見られた。一方で、「各班それぞれ同じいいところを話していても内容が違っていてもおもしろかった」「周りのみんな同じような例でも、内容は少し違っていてもおもしろかった」という感想も見られた。生徒が考える「いいところ」自体は同じでも、いいところだと考えた理由や、スライドの作り方に違いが出ており、そういった違いを発見した生徒がいたことも重要で

あった。

次に、発表の方法（スライドの作り方、説明する文章、話し方）についてである。本單元では、画用紙をスライドに見立て、紙芝居形式で発表するという方法をとった。これは、毎回の授業でのパソコン利用が困難であったことが主な要因であったが、結果としてプレゼンテーションソフトを利用する以上に、それぞれの班の個性を出すことが可能となった。見やすいスライド作成のための基本的な内容は、画用紙の場合も変わらないため、スライド作成の基本の学習もできた。

発表の方法に関する感想を、生徒の振り返りシートから見ていく。話すスピード（「ゆっくり話すことが大切）、話し方（「ハキハキ話すこと！」「声のトーンが暗いと、せっかく学校の良い所を言っているのに、少しだけ魅力が半減するよう感じました）、説明する文章（「間いかけを入れるとよりよいスピーチになると思った」「説明を簡潔にまとめた）、スライドの内容（「絵があると、文字のみよりわかりやすいし、楽しい」「色ペンなどを使って、もっと見やすいスライドにしたい）など、発表の方法についても、クラス内発表を経て、それぞれに学び取っていることが見て取れた。

2) グループワークについて

そして、グループワークについてである。グループワークという手法自体が、能動的な学習（アクティブ・ラーニング）にするための方法であり、同時に班員内で「伝え合う」作業であった。班員で協力して1つの発表を作成することの楽しさと難しさの両方を経験していたことが、振り返りシートからは読み取れた。グループワークに対する肯定的な意見としては、自分だけでは気づけなかった考え方に気づけたこと（「普段気にしないようなことも話せばたくさんの意見が出てきて、すごくタメになった」、「このグループワークで改めて大谷高校はいいところがたくさんあると感じた）、グループで協力して作業に取り組めたこと（「みんなで協力してスライドを作成して、とても楽しかったです」「コミュニケーションがとれた。声の大きさなど、しゃべり方やスピードなどを考えてグループワークをできた）が挙げられている。グループワークの難しさについては、「グループワークの楽しさと辛さ」、「やっぱり誰かが仕切らないと進まないし、それに対する反応もないといけない」等、複数人で発表の準備を進めることについての意見が多く出された。その中でも、どのようにグループワークを進めるとよいかという自分なりの考えも出されており、「ひとりの意見ではなく、全員の意見があれば話が進みやすくなる。一人一人役割を見つける」といった振り返りの意見も見られた。

（2）「いいところ報告会」の分析：参加者評価シート及び生徒評価シートから

1) 高大連携型授業の意義

以上の中間まとめを経て、スライドの完成、案内物の作成を行い、報告会当日を迎えた。ここからは、「報告会」実施の意義について、生徒の感想及び参加者の評価シートから見ていきたい。なお、いいところ報告会の参加者は、稚内北星学園大学教職員 12 名、同学生 13 名の計 25 名であった。

まずは、参加者の評価シート自由記述欄を見ていく。評価シートの自由記述欄の感想・意見は、以下のとおりである。

- ・生徒達が自分の学校に誇りを感じているのが伝わりました。
- ・緊張しながらも、一生懸命に発表していてとても良かったです。色んな人がいっせいに話していて、

- 聞こえにくい所もありましたが、わいわいとした雰囲気緊張しすぎずに良かったと思いました。
- ・大谷高校のことを全く知らなかったなので、この機会に知ることができ、非常に良い学びであった。緊張している子、堂々と話している姿がどれも印象的でした。またこのような機会があれば参加したいです。
 - ・どの班もしっかりとタイトルにそった内容になっていてすばらしかった。伝えるべきことをしっかり発表出来ていて聞いている側としてとてもききやすかった。他の班の声がかぶってしまうことがあったので、その点を改善するとよりよいだろう。
 - ・学生自身から学校の良いところを見つけ、発表するのはとても面白かったです。ところで「就職率」について、ほぼ当たってしまいましたので、想像外でした。
 - ・楽しい会でした。生徒の人の良さを知ることができた
 - ・生徒がはきはきと話している印象を受け、大変良い発表だったと思います。ただし内容に関しては、かぶっているものが多かったので、よりオリジナリティのある内容にできればより良いかと。
 - ・大谷の良い点など、詳しく説明されていたのでよかった。元気よく発表していていい。
 - ・このような行事を積極的に行うことはとても良いことだと思います。ぜひ続けていくべきだと思います。
 - ・聞こえる声では話しているけれど、周りに声がかき消されてしまっていた。
 - ・生徒が前に出る活動・イベントは互いにプラスになるので、これからも企画して下さい。
 - ・学校の良い所に浄土真宗があったけど、どの班も浄土真宗がなんなのかわかっていなかったの、学校の特徴を理解していないのかなと思いました。
 - ・このような発表会の形は初めてだったので、少々面食らった。概ねハキハキした発表で聞き取りやすかった。
 - ・高校生自身が自分たちの高校の良い所を話してくれるのがとても楽しかったです。スライドを作るのは大変だったと思います。その努力が見えました。
 - ・こういった交流が続くと嬉しいです。将来的にテーマを変えて大学生も同じような発表をすると面白いのでは？

この感想から、大学の学生・教職員にとって、大谷高校の生徒から同校の「いいところ」を聞く機会があったことは、「生徒にとってどういう学校なのか」を知る機会になったことが確認できる。このことから、本単元のねらいである、「知らないに自分達の知っていることを伝える」という目的は達成できたと言える。この点については、生徒からも、外部に自分達の高校を知ってもらいたい機会になったという感想が出されている（「色々な方に大谷高校を知ってもらえる良いきっかけだった」、等）。

また、報告会が、大谷高校の生徒の人柄・雰囲気を伝える機会にもなっていたことが確認できる。「このような企画はこれから入学してくる中学生に向けてもやったらいいと思う」という生徒の意見もあったことから、高大連携にとどまらず、地域連携授業として、単元の内容に応じた発表の場の設定をすることが、今後の展開として検討されても良いのではないかと。

次に、生徒の感想を見ていく。まず、大学で発表をすることについてである。大学を会場とし、学生・教職員の方々を観客としたのは、自分達の知らない場所・知らない他者に対する発表の機会とするためであるが、「よい経験になった」という意見が多く見られた。

- ・大学の方と関わるのは緊張しました。けど、めったに出来る事ではないので良い経験だったと思います。
- ・大学で発表するので、大学生や先生も見にくるので、緊張はすごかった。発表して何を言われるのかと思ったら、見やすかったとか、わかりやすかったなどの感想もあれば、ストレートなことも言われた。この発表を通して学ぶことも多かった。
- ・なかなか大学にいて勉強することがなかったので、いい機会だったと思います。北星学園大学の学生みなさんも優しく、発表しやすい環境が整っていたと思います。
- ・本番はすごく緊張したけれど、聞いている大学生の方がたくさんリアクションをしてくださったり、質問もしてくれたので、もっと良いところを伝えたくなったり、やっていた楽しかったので、とても良い経験でした！
- ・発表をきいてくれた方々にいいところを伝えることができたと思います。大学生の方と交流することができたので、良い経験になりました。
- ・生徒だけでやったときと、大学の方々が来てやるのでは、緊張感がまったく違った。でも、周りの方々も、真剣に聞いてくれていたので、話しやすかった。
- ・大学の先生、学生の意見・感想を聞けて良い経験になったかと思います。
- ・初めて会った人の前で発表するっていうのはやっぱり抵抗があったけれど、実際にやってみたら意外と楽しかったです。ちょうどいい緊張感でワクワクしました。
- ・大学内で発表するのが新鮮で楽しかった。
- ・大学の中で発表する事に、とても緊張しました。
- ・知らない人に発表をするのは、とても緊張したけど良い経験になりました。
- ・今までは自分の知っている人達の前で発表していたので、知らない人の前で発表するのは少し緊張した。アドバイスももらったので次のときに生かしたい。

また、感想には書かれなかったが、この報告会ではじめて大学に訪れたという生徒も数人いた。普段あまり入ることのない大学、そしてなかなか接する機会のない学生、教職員との交流自体が新鮮だった、という意見を、報告会当日に生徒から聞いた。大学の掲示物等を見て、大学で行われていること、学生・教員が行っていることに触れたり、学生・教員がどういう人なのか、その雰囲気を知ったりと、高校生にとっては、大学という文化に触れる機会でもあったように思う。生徒の感想の中には、「次は大学生の発表を見てみたい」というものもあり、高校生・大学生がテーマを設定して発表し合い、交流し合う、という取り組みも、今後の展望として考えていくとよいのではないだろうか。

2) 報告会における質疑応答について

次に、報告会における発表後の質疑応答についての意見・感想を見ていく。実際の報告会では、質疑応答の時間は3分程度しか設けることが出来なかった。参加者である学生・教職員からも、もう少し応答の時間が長いといいのではないか、という意見も出された。

他方、短い時間ではあったが、生徒の感想からは、アドバイスや意見をもらえたことに対する肯定的な意見や、一方で質問に十分に答えられなかったことに対する反省が見られた。

- ・緊張したけど伝えることができた。アドバイスや感想がもらえてよかった。
- ・交流をすることはいいと思います。他の学校の人に、大谷のいいところを知ってもらえるいい機会となりました。
- ・聞いてくださったみなさんが、しっかりとした意見をくださり、とてもためになる報告会になった。
- ・大学の方に発表を見てもらい、厳しい意見ももらいましたが、それをいかしてこれからの授業に役立てたいです。
- ・とても緊張しました。少し勉強不足なところがあったので、質問に対して的確に答えることができなかった。リアクションをしてくれた人がいたので、とても嬉しかったです。
- ・色々質問されて、それを答えたりするのが大変。すごく緊張した。
- ・正直に言うと、報告会をやるまでは「なんで報告会をやらないとだめなんだ」と思っていたけれど、実際にやってみると、学生や教職員の感想が良い感想ばかりでうれしくてやって良かったなと思った。
- ・厳しいお言葉もありましたが、自分にとってとてもいい経験になったと思います。先生も言っていました、厳しい言葉が社会では当たり前なので、言っただけですごくありがたかったです。また、感心させられたこともあったので、このような機会がまたあると嬉しいです。

3) 報告会実施上の課題について

最後に、報告会実施上での課題について二点述べる。

第一に、報告会実施の時間帯の設定の難しさである。高校と大学では、授業・講義実施時間帯が異なることから、高校の授業時間内で報告会を実施するためには、どうしても大学の講義時間と重なることになる。本報告会では、学生の講義が少なく、かつ教職員が参加しやすいと思われる時間帯に設定したが、すべての学生・教職員が参加可能な時間に設定することが難しかった。

第二に、第一の点とも重なるが、時間設定の難しさにより、報告会自体の実施時間が短くなってしまった点である。報告会は、大学と高校の授業時間のずれにより、1時間程度になった。それゆえ、質疑応答の時間が短かったことは、本科目及び本単元の目標からしても、残念なことであった。

以上の課題を克服するためには、例えば大学の講義・ゼミと連動させるなど、大学側と連携を取って時間設定を検討する必要がある。その際、高校生が学生の発表を聞いたり、あるいは、学生・高校生が共にグループワークをして、あるテーマについての意見交流をしたりするなど、生徒・学生間の交流が深められると、よりよいのではないか。それは、本科目の「伝え合う力」を形成する上でも一定の効果を持つと考えられる。

(3) 本単元全体の生徒の学び：振り返りシート分析

報告会実施後、参加者評価シートのフィードバックを行った。それを受けて、生徒には本単元全体を通じて学んだこと・反省点を、振り返りシートに記入させた。

特に感想が多かったのは、グループワークについてである。中間評価と同様、基本的にはグループワークに対する肯定的な評価が多かった。また、シートには書かれなかったが、人前で発表することが苦手な生徒もいる中で、個人発表とせずグループ発表としたことで、苦手な発表に取り組めたとい

う声も聞いた。

- ・グループで行うことで不安もそこまでありませんでしたし、グループ学習いいと思いました。
- ・緊張をしたが、しっかりと自分の役目を果たせたので、良かった。グループでできたのも良かった。
- ・グループ作業でやるのは協力できてとても楽しかった。
- ・1からスライドをみんなで作ったり、発表もスムーズにできたのでよかったと思いました。
- ・班の人と協力したりすることがたのしかった。

また、報告会当日は、他クラスの発表を聞く機会も設けた。それに対する感想もあった。クラス横断的な活動をできたことも良かったように思う。

- ・楽しくできてよかった。色んな班のが見れてよかった
- ・色々なグループのいいところを聞けてとっても良かったです。また、こういう機会があればいいなあと思った。

また、「自分の考えをまとめる」こと、その考えをグループの中で整理し、スライドにしていくことの難しさについては、以下のような感想があった。

- ・自分たちで考えた、自分の高校のいいところをちゃんと表現できていたか、少し不安でしたが、楽しいと言ってくれる人がいてよかったと思いました。
- ・自分達でスライドをつくり、発表するという機会がなかったので、いい経験になった。
- ・緊張、楽しんだ、もっとできた、失敗したなどの感情があり、発表の難しさなど学ぶことが多かったです。

おわりに—本実践の課題と展望

以上、国語表現における「私達の高校のいいところ報告会」の実践について、生徒及び観客である学生・教職員の感想をもとに整理してきた。

まず、アクティブ・ラーニングの手法をとった「報告会」の準備・実施・反省についてである。本単元では、発表する内容についての基礎的な知識の導入はなく、「自分達の考える高校のいいところ」を考えることから始めた。そのため、アクティブ・ラーニングの課題とされる「体系的な知識の習得のバランスが取りにくい」という点については、そこまで問題にならなかったように思われる。なお、スライド作成の手法や、発表の技術、案内物の作成方法等、知識として習得が求められる内容については、報告会後の授業において、改めて一斉授業形式で学習を行うことで、定着を図っている。

他方、グループワークの進め方については、検討の余地が残る。本単元以前の学習を通じて、グループワークの方法に関する学習を行ったものの、グループでひとつのものに取り組むという経験が必ずしも十分ではなく、班によってその取り組み方は様々であった。グループワークの進め方について、その難しさを学んだという意見も見られたものの、発表の準備にどの程度関わられたかは、個人差があったように思う。グループワーク自体については、生徒からの肯定的な感想が多数を占めたものの、アクティブ・ラーニングの課題の第二である「活動主義」に陥らないようにするためには、毎回の学習目標を細かに設定すること、グループワークと個人作業、一斉授業を織り交ぜながら行うこと等、従来の授業以上に綿密な授業計画が求められるだろう。

次に、高大連携型授業についてである。本授業においてこの報告会を実施できたのは、稚内大谷高校と稚内北星学園大学間の連携関係が大きい。2015年度より稚内大谷高校が旧稚内商高高校校舎に移転したことにより、地理的にも教育実践の連携がしやすくなったことも要因のひとつである。

本単元が、「自分達の知らない他者に対して発表を行う」ことを目標としたことから、高校以外の場所—今回は大学—で発表を行えたこと自体が、学習目標達成上、重要なことであった⁴。また、「報告会」という内容から考えると、高校を知らない小・中学生を対象とすることもあり得るだろう。その意味で、「国語表現」は、科目の特性上、高大連携型授業にとどまらず「地域連携授業」に発展させていく可能性を有している。

他方、高大連携の形で授業を実施したことの利点もある。一番の利点は、生徒が大学の文化に触れる契機となったことである。生徒との交流を通じて、「大学とはどういうところか」「大学で学ぶとはどういうことか」イメージがあまりないこと、そして、地域にある大学であってもなかなか足を運ぶことがないことがわかった。また、本科目を選択している生徒達の多くは、卒業後就職するため、今後大学に接する機会を持つことが難しいであろうと予測される。大学は、進学する学生だけのものではなく、その地域に暮らす人達の学び・文化の拠点でもある。進学する生徒だけでなく、就職する生徒に対しても「大学の文化」に触れる機会を設けられたことは重要であろう。この点に関わって、池田は、大学の地域連携授業について、大学を「世代を超えた学習の拠点としていくための可能性を秘め」ていることを指摘している⁵。大学を地域の学び・文化の拠点とする上で、高大連携型授業を実施することは重要であろう。同時に、生徒にとっても、地域にある大学をどのように利用するかを知る機会にもなったのではないか。

本単元において、ほぼ全ての班が「私達の高校のいいところ」として「地域に信頼されている学校」を挙げたことがとても印象に残っている。その理由は班ごとに様々であったが、高校生から「地域」の視点が出されることは、著者にとっては意外であった。稚内大谷高校は、地域立学校であるという視点を大事にしており、この地域で求められる高校の役割を長いスパンで考えながら、さまざまな教育活動・地域活動を行ってきている学校である。そのことを、生徒達も認識していることの表れだと受けとめた。生徒達にとっても、学校外で発表することは、国語表現の学習目標達成のためだけではなく、学校外の地域の大人から自分達の学習活動を見てもらい、激励してもらい機会にもなったと考えている。

●注

(1) 細尾萌子「アクティブ・ラーニングをめぐる研究動向」日本教育方法学会編『アクティブ・ラーニングの教育方法学的検討』（図書文化社、2016年）188頁。

(2) なお、次期学習指導要領改訂の内容については、従来の学習指導要領と性格を大きく異にしていることが指摘されている。とりわけ、回答申においては、「資質・能力」、教育方法・教育評価、そして家庭・地域との連携を含めた学校運営の在り様についても言及されており、十分な検討が求められる。答申提出前の検討文献としては、児美川孝一郎「教育内容ベースから資質・能力ベースへの転換—学習指導要領改訂と知の再編」（『教育』No.849、2016年10月号、かもがわ出版）、佐藤修司「カリキュラム・マネジメントがめざすもの—学習指導要領改訂と教育政策—」（『教育』No.849、2016

年10月号、かもがわ出版)、梅原利夫「指導要領改訂作業『審議のまとめ』から見えてきたもの」(『人間と教育』91号、旬報社、2016年)、等。また、教育方法学的立場から、特にアクティブ・ラーニング導入についての批判的検討をしたものとして、田上哲「教育方法学的脚点からみたアクティブ・ラーニング」(日本教育方法学会編『アクティブ・ラーニングの教育方法学的検討』図書文化社、2016年)が挙げられる。

(3) 細尾・前掲、194-195頁。なお、細尾は、第三の課題として「アクティブ・ラーニングは日本社会の文化になじまず、キャリアに結びつかない」点を挙げている。

(4) それゆえ、単元の内容によっては、大学以外の「学校外」の場での発表を想定することもあり得るだろう。なお、今期の国語表現では、後期期間に「稚内市いい町化プロジェクト発表会」という単元を設定し、11月末に報告会と同様、大学を会場として発表会を実施した。この単元の場合は、その単元の内容から、大学以外の場所を会場とすること、あるいは大学を会場としつつも、発表会への参加を大学の学生・教職員に限らず広く呼び掛けることも可能性として考えられる。

(5) 池田裕子「地域連携授業の実践とその効果—能動的学修での学びを構築する教育方法」『稚内北星学園大学紀要』2016年、100頁。

●英文タイトル

The Educational Practice of “Kokugo Hyougen” Using Active Learning Methods and High Schools and Universities Cooperation: Prospects and Challenges of Community collaboration classroom practices

●英文要約

This paper is introducing the educational practice of "Reporting our high school's best parts". This practice is a part of "Kokugo Hyougen" in Wakkanai Otani high school at 2016s.

This practice is used active learning methods and high schools and universities cooperation.

In particular, this paper presents general outline of this practice. Next, perform practical analysis based on student impressions and participant questionnaire. Finally, present challenges and prospects of Community collaboration classroom practices